

第81回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2016年2月8日(月) 14時～17時

兼題「春泥」

- 川井素山 ○明かり消しなお臘梅の香る宿
春泥や地蔵の顔を拭く老女
山茱萸さんしゅゆの点描のごと黄の蕾
溶け始む雁木のつらら春近し
- 保井寶正 ○飽食に小さな贅の花菜漬
根深汁永遠の付き合い傘寿かな
大寒や道具いたわる庫裏の朝
春泥や茅の雫の音の果
- 青木英林 ○春立つやちよつと気分の違う朝
梅の香や坂道下る二人連れ
沈丁の香り詰めたる蕾かな
春泥に息吹の気配感じたり
- 後藤克彦 ○どか雪や積り積りて狛隠す
空家にて鳥呼ぶ梅を主とす
春泥やズボン新調で回り道
町起し古さを競ふ雛飾り
- 佐久間喬 ○春泥を跳ね上げ乾くランドセル
春近しボール蹴る子の頬赤く
車降り子等が駆け入る深き雪
鬼やらひこの時ばかり声高に
- 丸山酔宵子 ○篝火かがりびに浮かぶ神楽や淑気しゅくき満つ
冬日向庵の庭のししおどし
雪積り耐えるオリーブイナバウアー
荒波が風紋飛ばす雪砂丘
- 菊地崇之 ○そういえば妻の御機嫌落の臺
思いつる契りし川や温もりぬ
春泥や赤い鼻緒の下駄履いて
声すなり水澄見ゆる田螺かな

- 牧野里山 ○花の芽の体内時計眠り覚め
春泥に晴れ着気になりソロリ脚
碧き色どこまで続く冬の空
寒し夜家路たどれば灯あり
- 吉田啓悟 ○いらへなき返事を待ちて余寒かな
薄氷の底より明くる茜空
春泥や鳥の一団立てし波
鳥帰る一途なること強きかな
- 佐久間たか子 ○春泥に子等押しあつて笑い声
窓越しに庭花描く浅き春
日輪の患い和む福寿草
紅梅の香る路ゆく受験生
- 山本草風 ○大寒の硬き光に足怯む
担い売野菜と共に春の泥
冬晴れ日すべてを見せる平野かな
日昇り食卓の上春跳ねる
- 金森純女 ○春泥や轍のなかの青き空
天空の喝采聞こゆ冬銀河
冬薔薇ひねもす首を揺らしけり
寒牡丹雪ん子たちが守りたる
- 佐伯武雄 ○節分やひろって食べる一人酒
春泥や子供に戻る介護連れ
老ゆる身に心揺さぶる梅の花
風光る薄着待てずに駆ける子ら
- 大山龍海 ○春泥の轍凍りて春遠し
春泥に轍残して村の道
七十路春泥跨ぎ身を守る
曇天に水中花あり光射す

次回「萩句会」

日時 2016年3月14日（月）14時～17時

場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題『草餅』『草団子』一句 当季雑詠三句 計四句